

「秋田青年師範学校跡地」に石碑設置

御所野の歴史文化を語る会

現在の秋田市御所野地蔵田五丁目のあたりには、第二次大戦当時、「秋田青年師範学校」の校舎や寮がありました。戦後、秋田師範学校とともに秋田大学学芸学部（現教育文化学部）となり、平成2年まで秋田大学教育学部四ツ小屋校舎・農場として使用されました。その後、御所野開発により校舎・農場は姿を消しましたが、地蔵田五丁目南町内のポケットパークには、校地内にあった桜の大木の切り株が残っており、この切り株が、ここに「秋田青年師範学校」があったことを伝える唯一の証拠となっています。

そこで、御所野の歴史文化を語る会では、開発前の御所野台地の歴史を後世に永く伝えていきたいと考え、市当局及び関係各位の御理解、御協力を得て、桜の木の切り株の近くに「秋田青年師範学校跡地」であることを示す石碑を設置しました。

【碑文】 秋田青年師範学校跡地

昭和十年	青年学校教員養成所発足
昭和十六年	この地、小阿地狸崎に移転
昭和十九年	秋田青年師範学校に改称
昭和二十四年	秋田大学学芸学部へ包摂
平成二年	御所野開発により解体



令和6年10月 桜の切り株が残る地蔵田5丁目ポケットパークに記念碑設置



地蔵田5丁目南のポケットパーク



桜の大木の切り株

秋田青年師範学校とは・・・

◎秋田青年師範学校の歴史

大正12（1923）年：「秋田県実業補習学校教員養成所」が、南秋田郡旭川村（現秋田市）の県立農事試験場に併置され開校

昭和10（1935）年：「秋田県青年学校教員養成所」に改称

昭和16（1941）年：河辺郡四ツ小屋村小阿地字狸崎の地に校舎を新築し、独立移転

昭和19（1944）年：「官立秋田青年師範学校」に改組・改称

昭和24（1949）年：秋田大学発足により同大学学芸学部へ包摂、四ツ小屋農場となる

平成2（1990）年：秋田新都市開発整備事業（御所野開発）により校舎群解体

◎四ツ小屋村に新築移転した青年学校教員養成所（『秋田県教育史』より）

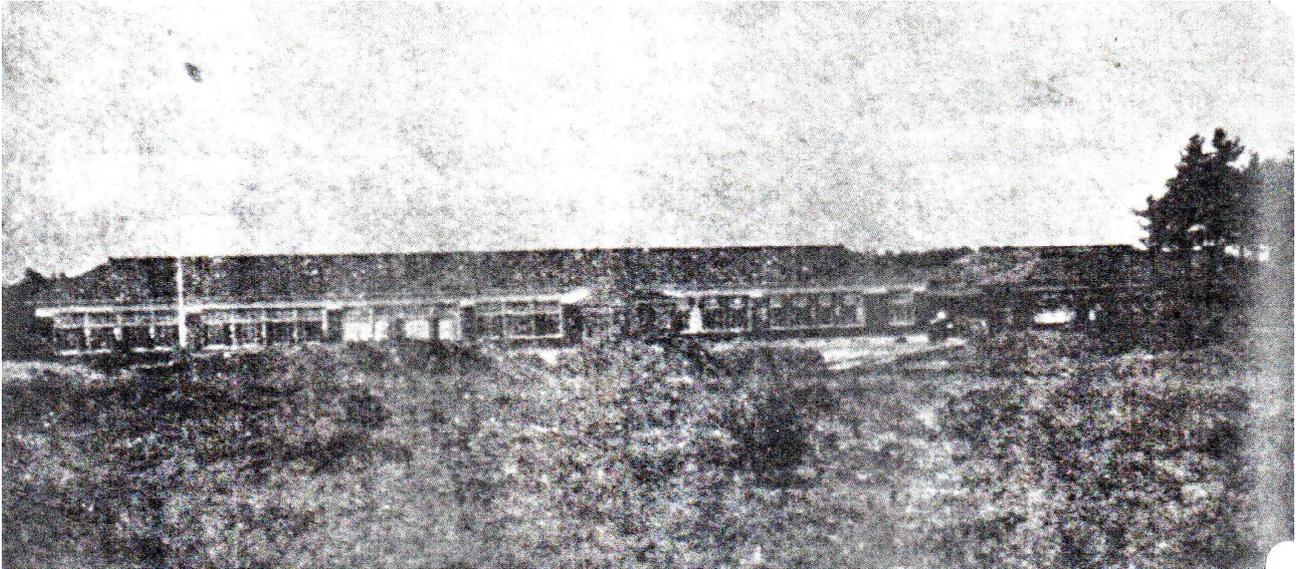
青年学校教員養成所はいろいろな曲折を経ながらも、昭和13年12月の県会で独立移転が決定し、それに伴う予算も可決されていた。工事を着工したのは翌14年8月であるが、完成したのは2年後の16年7月で、この時点で農事試験場から移転することになった。

新校舎は当時の河辺郡四ツ小屋村（現秋田市）で、敷地は同村から9町9反7畝余を寄贈してもらい、総予算額は5万3千870円余が見積もられている。またその中には河辺郡各町村と郡教育会から寄付金5千円も含まれていた。

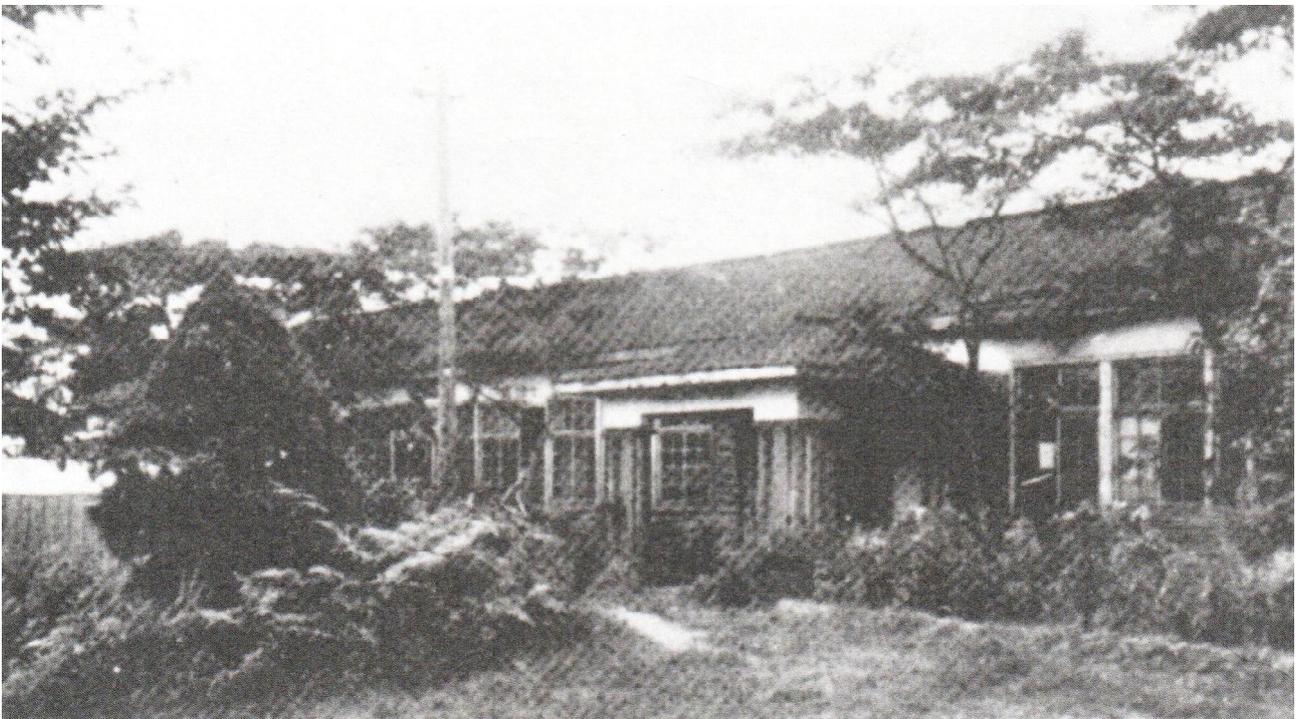
新校舎は木造平屋建430坪余りで、その資材は元日赤秋田支部の本館・付属建物の一部を譲り受けたものである。本館には事務室・所長室・教室・教弁室・実験室・宿直室、小使室などをほぼ東西に並べ、それに接して東側に南寮を置いた。そこから北に直角に廊下をのびし、南寮と平行した北寮と結びつけ、北寮には食堂・舎監室・風呂場・炊事場・炊夫室・加工場などをおいた。農具舎・収農舎及び農夫室等は別棟としたが、これは寺内町から運んだものである。このほか4町3反歩の実習農場と2千400坪の運動場、そして4町歩の原野が備えつけられていた。



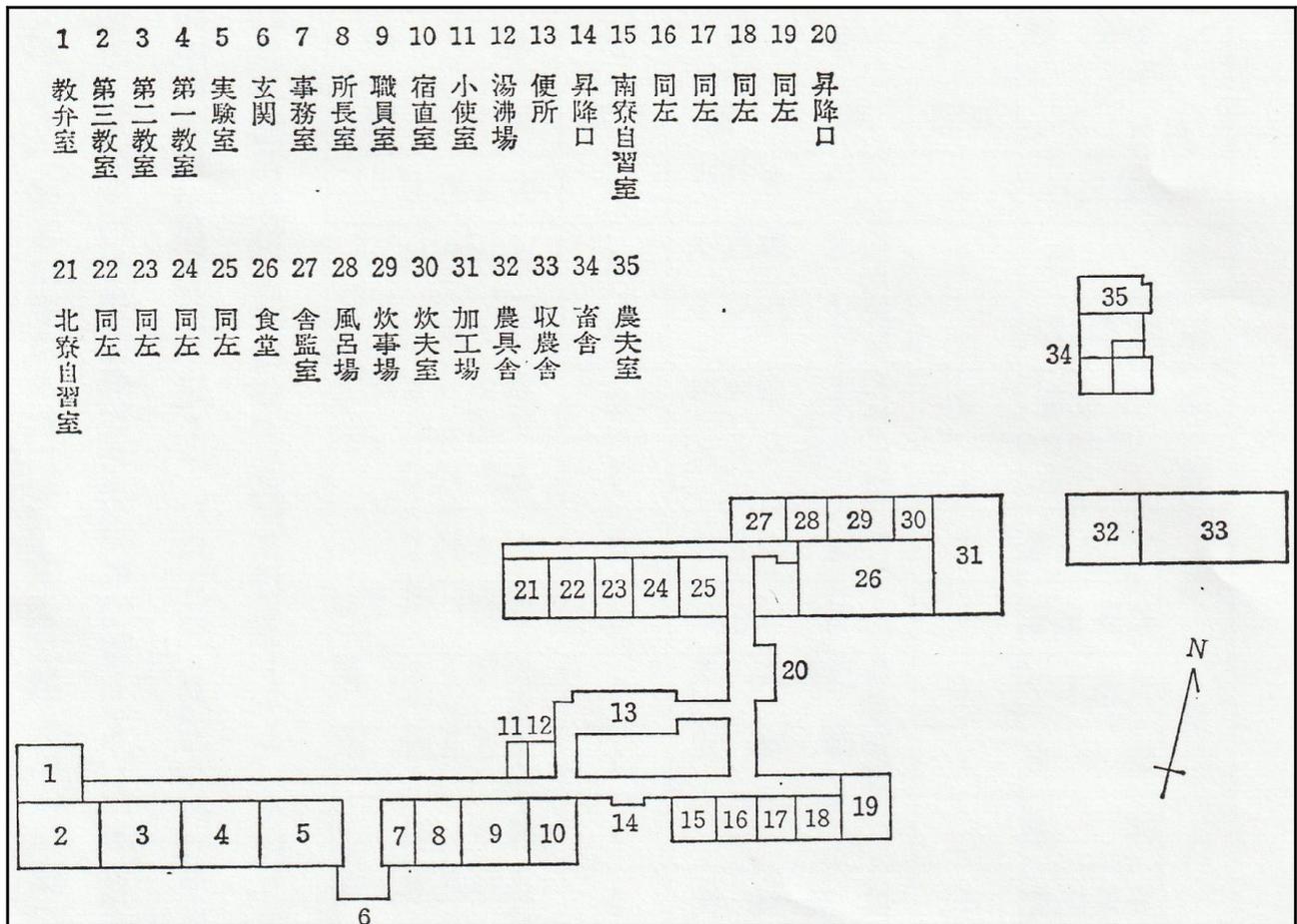
校章 (『創立百年史 秋田大学教育学部』より)



秋田青年師範学校校舎全景 (『創立百年史 秋田大学教育学部』より)



秋田青年師範学校校舎 (『秋田県教育史』より)



校舎平面図 (『創立百年史 秋田大学教育学部』より)

御所野の歴史文化を語る会会員の寄稿

◎三浦吉助氏(当会前会長)

戦争が烈しくなるにつれて、昭和19年1月「緊急学徒勤労働員方策要綱」によって学徒動員が本格化し、同20年3月には「決戦教育措置要綱」が閣議決定された。国民学校初等科を除いて全ての学校は、原則として4月1日から1年間停止することとし、「戦時教育令」と「同施行規則」を交付するに至り、勤労青少年教育の制度は形式的には整備されたにもかかわらず、教育内容の面ではかえって後退しながら終戦をむかえる結果となった。

戦後の昭和22年3月、新たに「学校教育法」が交付されて、従来の「国民学校令」、「青年学校令」は廃止された。そして、新制中学の義務制が実施され、実業補習教育は新制高校の定時制課程へ受け継がれることになった。

青年学校教員養成所については、昭和19年2月「師範教員令」に改正を加えられ、府県立青年学校教員養成所を師範学校の一つとして官立に移管することになり、四ツ小屋教員養成所は廃止されて「官立秋田青年師範学校」と改称された。

次いで昭和24年5月、秋田師範学校は秋田大学に改組したことから、青年師範学校も秋

田大学に包括されることになった。たまたま四ツ小屋村の善意によって設立を見た青年学校教員養成所の歩みが、こんなにまで変転を余儀なくするさまは、何とも悲しくなるような気がしてならない。時代をつくるわれわれ一人ひとりが、しっかりと社会を支えなければならぬことを痛感する。



開発工事中の秋田青年師範学校跡地

◎藤原立宏氏(当会会員 平成11年9月15日 記)

～青年師範学校について～

私たちが学んだ「青年師範学校の概要」と「校舎周辺の激しい変貌」について述べてみます。

【青年師範学校の概要】

私は、昭和20年4月、秋田青年師範学校に入学(40名)し、22年2月卒業しました。戦争中に入学し、在学中に終戦を迎え、戦後の混乱期に卒業するという、激動の時代に学校生活を送りました。

昭和10年4月、前身の青年学校教員養成所(就業年限2年・定員30名。県農事試験場に併設)が発足し、16年7月、御所野台地南西の端に独立の新校舎ができてそこに移転しました。18年2月、「師範教育令」により秋田青年師範学校(修業年限3年)と改称されましたが、戦後、23年限りで青年学校が廃止されたので、青年師範学校も26年3月、廃止になってしまいました。9年の間、時代の荒波に揉まれ続けた悲運で短命な学校でした。

54年前、寮生活も経験し、思い出の多い学生生活を過ごしましたが、よもやそこが先住

民の住居跡があった場所とは全く知るよしもありませんでした。資料によると、地蔵田A遺跡のC地点に校舎や寮が建ち、B地点にグラウンドが、狸崎B遺跡地点に実習農場があったわけです。



寄宿舎（南寮）（『創立百年史 秋田大学教育学部』より）

【校舎周辺の激しい変貌】

私が遺跡発掘に関心を持ったきっかけは、今から9年前、「校舎独立五十周年記念誌」を編集するように先輩から依頼された時からです。同窓の皆さんに校舎の現状を伝えるために現地に足を運ぶ必要が生じました。そのため、3回校舎(跡)を訪れました。

・一回目（平成2年9月15日）

ひっそりと静まりかえっている無人の校舎。半世紀の長い間 風雨に晒されてきた痛々しい姿に、胸がしめつけられる思いがしました。

・二回目（平成5年11月3日）

校舎は取り壊されて跡形も無くなっており、グラウンドを含めた校地一帯は表土が綺麗に剥ぎとられて草一本ない裸状の発掘現場と化していました。

・三回目（平成10年7月1日）

遺跡は完全に埋め戻されて姿を消し、運ばれてきた黄土がうず高く積まれ、宅地造成の真只中でした。こころに校舎があった筈だと思われる地点に、ヤマザクラの木が一本忘れられたかのように寂しげに残っていました。ここで感きわまって三句作りしました。

轟音を響かせ進む ブルドーザー 御所野台地は いま変容す
影暗き 御所野の森は 変わり果て 黄土一色の 造成地となる
学び舎の 跡にひとと ヤマザクラ 変わる姿に 何を思わん

現在は、青年師範学校の所在地を知る手がかりになるのは、この一本のヤマザクラの木だけとなりました。この木は、玄関の近くに生えていたもの（昭和40年代に植えられたものか?）で、この木を中心にして懐かしい校舎や寮や農具舎などの位置を思い描くことができます。この一本の本が残ったことは、私には奇跡としか考えられません。ときどき、

このヤマザクラの木を訪ねて当時のことを偲びたいと思っています。今年（平成11年）の4月29日、花が満開でした。



秋田青年師範学校跡地に残る桜の大木(平成11年4月29日)